

論 説

強制収容所を生き抜いた抵抗運動の女性闘士
——イルマ・トゥルクザク——

伊 藤 富 雄

目 次

- はじめに
- I 子供時代と青春時代
- II コメンスキ学校連盟の教員時代
- III 抵抗運動活動へ
- IV トゥルクザクの逮捕とラーフェンスブリュック強制収容所への移送
- V ラーフェンスブリュック強制収容所での抵抗運動
- VI ウィーンへの帰還
- VII 「ラーフェンスブリュック強制収容所共同体」の設立
- おわりに

は じ め に

数年前、オーストリアの反ナチ抵抗運動に関して意見交換していたウィーンの友人から初めてイルマ・トゥルクザクの事を聞かされ、さらに彼女のテレビ・インタビューを見せてもらった。当時すでに 90 歳を超えていたトゥルクザクだが、全く歳を感じさせることなく、淀みなく、元気で自分の過去を物語っていた。どう見ても普通の「おばあちゃん」でしかない彼女が、残酷なナチ体制下で抵抗運動を行ない、かつ逮捕後に送られた恐怖の絶滅収容所でもさらに抵抗運動を継続しつつ、戦後まで生き延び、戦後もまた一貫してファシズムやネオナチズムに反対し、民主主義擁護の運動を継続している事実に私は圧倒され、魅了されてしまった。それ以降、トゥルクザクに関する著書や論文を読み、さらにトゥルクザクが長年関わっていたウィーンにある「ラーフェンスブリュック強制収容所共同体」事務局とも連絡を取り、彼女に関する様々な資料や情報を与えてもらった。トゥルクザクは 2012 年 10 月 2 日、95 歳の誕生日を元気に迎えたとのことである¹⁾。この論文はラーフェンスブリュック強制収容所を生き抜いたトゥルクザクの人生を辿り、彼女の逮捕前の抵抗運動、強制収容所内での抵抗運動、さらには戦後の彼女の活動の実態を明らかにするものである。

1) 「ラーフェンスブリュック強制収容所共同体」のホームページのメールアドレスは以下の通りである。
<http://www.ravensbrueck.at>.

I 子供時代と青春時代

トゥルクザクは第一次大戦中の 1917 年 10 月 2 日にスロヴァキア人の移民労働者の家庭の 4 人兄妹の 2 番目としてウィーンに生まれている²⁾。当時のウィーンには 25 万人から 30 万人のスロヴァキア人とチェコ人が住んでいたと言われている。トゥルクザクの父親は靴職人としての徒弟奉公を終えたが、靴屋の仕事を嫌って、氷工場で働き始めた。トゥルクザクは父親のことをこう語っている。

「父は非常に稀な存在でした。彼には人を引き付ける素晴らしい魅力があり、すぐに人を魅了しました。(。。。) 父親は私たちに対して非常に優しく、母親のような存在でした。私たちが悲しがると、父は私たちを腕に抱き、慰めてくれました。」³⁾

氷工場では仕事のない冬場に大抵の労働者は解雇されたが、トゥルクザクの父親は解雇されることなく、後には機械操作担当の副主任にまでなっている。また小学校を出ていない父親は夜間コースに通って勉強したという。彼は政治的には社会民主主義労働者党(チェコ人部局)で活躍したが、後には金属労働者組合の幹部にもなっている⁴⁾。

一方トゥルクザクの母親は幼い頃から祖母の元に預けられ、ハンガリーの学校に通った。そのため彼女はスロヴァキア語とハンガリー語しか話せず、ドイツ語はほとんどしゃべれなかったという。トゥルクザクは母親のことをこう語っている。

「母はとても内向的な女性でした。でも非常に厳しい女性でもありました。私たちを酷く殴ったことはありませんでしたが、2 番目の兄は背中をじゅうたん用の叩き棒で叩かれたことがありました。」⁵⁾

トゥルクザクの家ではスロヴァキア語しか話されなかった。しかしウィーンにはスロヴァキア人の小学校はなかったので、トゥルクザクと兄弟姉妹たちはチェコ人の学校へ通った。その学校にはスロヴァキア語のクラスもあったからである。

2) トゥルクザクの自伝に関しては、トゥルクザクに直接インタビューを行ない、初めて彼女の詳細な人生を明らかにした Cécile Cordon の以下の著作に負うことが多かった。

Cordon, Cécile: Ich weiß, was ich wert bin! Irma Trksak — Ein Leben im Widerstand. Mandelbaum Verlag 2007, Budapest.

3) Ebd., S.23.

4) Mayrhofer, Hemma: "Bis zum letzten Atemzug werde ich versuchen dagegen anzukämpfen" Irma Trksak — ein Lebensweg des Widerstehens. In: DÖW Jahrbuch 2005. S.146.

5) Cordon, a.a.O., S.25.

トゥルクザクによれば、その学校の教員たちは「子供たちよりも酷いチェコ語」しかしゃべれなかったという。何故ならウィーン市当局は当然ながらほとんどドイツ語しかしゃべれないオーストリア人の教員を採用したからである。

この間にチェコ人も大学入学が許されるようになった。トゥルクザクも大学入学資格を得るため、実科ギムナジウムへ入学することになる。

トゥルクザクが大学入学資格を得たチェコ人用の実科ギムナジウムは現在のウィーン3区にあった。コメンスキ学校連盟によって設立されたこのギムナジウムはウィーンで最もモダンな学校だった。トゥルクザクは卒業式の思い出を茶化してこう述べている。

「私たちはこの学校の最初の卒業生でした。イニツァー枢機卿までやってきて、我々を祝福しました。もしかすると私も洗礼の飛び散った水を被ったかもしれません。そもそも私はプロテスタントなのです。」⁶⁾

トゥルクザクの青春時代は政治的には混沌とした時代だった。当時のオーストリアは経済危機とインフレに直面していた。インフレは1924年のシリング導入でようやく落ち着いていたが、銀行危機は毎年生じ、ウィーンでは約5万人が失業していた。こうした情勢の中で社会民主党系の共和国防衛同盟と右派の郷土防衛隊が衝突することになる。1927年1月30日、ブルゲンラント州で衝突が起こり、共和国防衛同盟のメンバー2名が射殺された。銃を発射した郷土防衛隊員には裁判で無罪が言い渡され、それに抗議する労働者の激しいデモが生じた。いわゆる1927年7月騒乱事件である。社会民主党のウィーン市長や党指導部は平静を呼びかけたが、警察が発砲し、89名の労働者が犠牲となった。1928年8月にも社会民主党の共和国防衛同盟と右派の郷土防衛隊が衝突し、共和国防衛同盟に死者を含む多くの犠牲者が出た。

1931年9月、右派の郷土防衛隊による一揆が生じたが、郷土防衛隊に友好的な政府はなかなか一揆鎮圧のための軍隊を出動させようとはしなかった。社会民主党の指導者らの強い要請に、政府はようやく一揆鎮圧のために軍隊を出す。一揆指導者たちは一早く隣国ユーゴスラヴィアへ逃亡し、郷土防衛隊兵士たちから武器も押収されず、逮捕・起訴もなされなかった。そうした中で1932年5月、キリスト教社会党のドルフースが連邦首相に就任する。ドルフースはイタリアのムッソリーニの支持も受け、権威主義的、愛国的、カトリック的な「祖国戦線」の運動を起こした。すなわち、それまでの郷土防衛隊とキリスト教社会党を統合し、一方で台頭していたナチスに対して有効に対抗し、かつオーストリア独特のイデオロギーを作り出そうとしたのだった。そして翌1933年3月には共和国防衛同盟が解散させられ、4月にはデモの

6) Ebd., S.36.

禁止, 5 月には共産党が, さらに 6 月にはナチスが非合法化されてしまった。社会民主党はまだかろうじて存在していたが, オーストリアは一気に右傾化していく⁷⁾。

1934 年 2 月, 共和国防衛同盟による 2 月蜂起の失敗後, 社会民主党の指導者たちはチェコスロヴァキアへ亡命する。こうした当時の状況をトゥルクザクはこう語っている。

「父は共和国防衛同盟に加わってはいませんでした, 根っからの社会民主主義者でした。1934 年には私はまだ高校生でした。まさに最悪の闘いが生じたこの時期に私はスキーの講習会に出かけていました。家に戻ってきて, 恐ろしい出来事を聞かされました。私たちはその後で衝突の現場に出かけて行きました。オーストリア人が同胞に為し得たことを見るのは恐ろしいことでした。」⁸⁾

さらに同年 7 月, 政府軍兵士に変装したナチスの武装集団が首相官邸を襲い, ドルフースは逮捕, 銃殺されたが, このナチスによる一揆自体は失敗し, シューシュニックがドルフースの後を継いで首相となる。このシューシュニック体制は 1938 年 3 月のヒトラーによる最後通牒を受けて辞任するまで続くことになる。

II コメンスキ学校連盟の教員時代

1936 年, 大学入学資格を得たトゥルクザクは教師になる決心をし, チェコスロヴァキアのプラハにあった教育アカデミーに入学した。教育アカデミーには 1 年間と 2 年間の学修期間を選択できたが, 経済的な余裕のなかったトゥルクザクは 1 年間のコースで学ぶことにした。またコメンスキ学校連盟から無利子の奨学金の融資を受けた。トゥルクザクは家具職人の家庭の住み込みの家庭教師などをしながら苦学の末, 無事アカデミーを卒業する。卒業と同時に彼女は奨学金返済のためにコメンスキの学校で教師として採用されることになった。

トゥルクザクがウィーンに戻り, コメンスキ学校連盟の教師として最初に赴任したのはウィーン 20 区の小学校だった。彼女は小学校では 1, 2 年生の授業を担当し, さらに中学校では 1 クラスで体操の授業も受け持った。彼女はチェコ人の労働者運動連盟に参加し, 運動も得意だったからである。しかしコメンスキ学校連盟の教師の契約は毎年夏休み前に終了し, 一年毎の契約という不安定なものだった。それでもトゥルクザクは自分の手でお金を稼いだ喜びを語っている。

7) この時代状況に関しては拙稿参照。「オーストリアにおける 1934 年 2 月蜂起とコロマン・ヴァリッシュ」立命館経営学第 47 巻第 3 号, 2008 年 9 月。

8) Cordon, a.a.O., S.40.

「私は自分で稼いだ最初の給料で何をしたか、今でもよく覚えています。私は母親の使っていた古い竈を取り除かせ、私の男友達と一緒に15区から手押し車で水桶付きの長時間燃焼ストーブを運んできました。さらに卵を3個買って、それを使って私のためにスクランブルエッグを作ってくれるよう、母に頼みました。私はそれが大好きで、一度しっかり食べたいと思っていました。」⁹⁾

それはトゥルクザクにとってつかの間の幸せな時期だった。彼女はシュテパニックという名前の魅力的な若者に恋をし、間もなく結婚するつもりだった。彼は大学生で、トゥルクザクと同じく1938年によく20歳になったばかりだった。

1938年3月12日、ドイツ軍は突如、オーストリアに侵攻。それに対して共産党はオーストリア国民に、ヒトラーの侵攻に抵抗するよう呼びかけた。しかしながらオーストリア国民の大多数は3月15日のヒトラーのウィーン入場を歓迎した。侵攻後、ドイツ軍はすぐさまユダヤ人への弾圧を開始する。最初の数日間で5万人が「保護検束」を受け、4月1日にはナチ体制に敵対していた人物、あるいはユダヤ人血統の著名なオーストリア人たちがダッハウ強制収容所へ送られた。その中に社会民主主義者の政治家ダンネベルクもいた¹⁰⁾。

ウィーン在住のチェコ人はナチ政府に忠誠を誓わざるをえなかった。ドイツ軍侵攻直後の3月13日、非アリア人の職員は全員解雇するようとの指示がチェコスロヴァキア公使館になされた。またコメンスキ学校もユダヤ人教員を解雇するよう強要され、全生徒の6分の1が教員不足からドイツ人の学校へ転校せざるをえなかった。

トゥルクザクはユダヤ人に対し、同じ異郷に住んでいる者同士として連帯感を抱いていた。彼女は多くのユダヤ人家族から、子供たちにチェコ語を教えるよう頼まれた。チェコスロヴァキアへ移住した際に言葉が分かるようにである。ドイツ軍侵攻後、ただちに多くのチェコ系、ユダヤ系市民はチェコスロヴァキアへ移住するため、チェコスロヴァキア領事館へ駆け込んだ。トゥルクザクはその際彼らの移民の申請書作成の手助けもしている。トゥルクザクはこうしたユダヤ人家族との付き合いを密告されたこともあった。しかしトゥルクザクはユダヤ人の商店で買い物をするなど、ユダヤ人との連帯の態度をとり続けた。ある時彼女はユダヤ人の店でベーコンのカスを買った時のことを記している。

「私はベーコンのカスは好きではありませんでした。しかし私の持っている僅かなお金で他に何が買えるというのでしょうか（。。。）私が店を出ると、すぐに良からぬ連中が集まってきて、

9) Ebd., S.42.

10) この間の政治状況、およびダンネベルクに関しては拙稿参照。「アウシュヴィッツに消えたウィーンのユダヤ人政治家—ダンネベルク—」立命館経営学第50巻第2・3号、2011年9月。

私がユダヤ人かどうか、ないしは単なるシンパなのかで言い争いになりました。その後で彼らは私を殴り、弾劾するつもりだったのでしょう。でも私は彼らが争っている間に、逃げ出しました。」¹¹⁾

トゥルクザクは 1939 年の秋まではウィーン 2 区にあった小学校で教員として働いたが、生徒数の減少で、それ以降の雇用契約は延長されなかった。生徒数の減少の理由は、チェコ人の学校に子供を行かせる親たちがますます減っていったからである。子供をドイツ人の学校に行かせなければ、同化拒否と受けとめられたのだった。コメンスキの学校は 1940 年から 1941 年の学期はドイツ人の校長や教員を採用し、ドイツ語の授業を取り入れたために公的に学校として認可されていた。しかしその年が最後だった。1941 年 5 月以降は国からの全ての助成金がカットされ、さらに 1942 年 2 月、ウィーンの秘密国家警察はコメンスキ学校連盟の解散を命じ、財産を没収した。

トゥルクザクは早くからそうしたナチスの本質を見抜いていた。

「ヒトラーの権力掌握以降、およそ視線をドイツへ向け、ヒトラーの行動や演説に注目していた人、その人はこの男の政治がどこへ向かおうとしているのかを、すぐに理解することが出来たのでした。そして『我が闘争』の中のヒトラーの計画を読んだ人、その人はすぐにナチスのイデオロギーの本質を見極めることが出来たのでした。すなわち、ユダヤ人憎悪、反マルクス主義、〈ドイツ・アーリア人種〉拡大のための戦争の意図をです。」¹²⁾

III 抵抗運動活動へ

既に述べたように 1939 年秋に小学校を解雇されたトゥルクザクは、大学に通ったり、チェコ人の体操連盟で指導したりしていた。この体操連盟の指導員がハウデクだった。彼はこの体操連盟の中の数少ない共産主義者の一人で、大半は社会民主党员か革命的社会主義者だった。ハウデクは政治的な関心を有している者たちを集め、マルクス・レーニン主義の学習会を組織した。こうして体操連盟の中で様々な抵抗運動グループが結成されることになる。彼らは秘密国家警察からは単に「オーストリア共産党チェコ支部」と記されていた¹³⁾。

1940 年末、ファラッハが「ウィーン共産主義チェコ人運動」を立ち上げた。運動にはトゥルクザクを含め約 160 名のメンバーが参加し、常に 4 名から 5 名の小グループに分かれて活動を行なった。誰かが逮捕された場合に、そのグループだけが逮捕され、他のグループは逮捕さ

11) Cordon, a.a.O., S.50.

12) Ebd., S.51.

13) Mayrhofer, a.a.O., S.148.

れないためである。トゥルクザクのグループはホウデクの妻、トゥルクザクの婚約者シュテパニック、トゥルクザクが教えていた学校の管理人の息子、それにトゥルクザク自身の4名だった。

トゥルクザクは当時の事をこう述べている。

「私たちはとても早い時期から、ヒトラーの政治が少数派の人々にとって何を意味するかを知らされてきました。私たちは『我が闘争』と一緒に読み、ホウデクの解説に熱狂して聞き入りました。ナチスの侵攻後間もなくして私たちは、国民にヒトラーの目的を知らせようと思いつきました。何故なら道路の整備、軍需産業の強化、鉄道網の拡大、地雷工場の建設は戦争の準備以外の何物でもなかったからです。（。。）さらに間もなく、ヒトラーは少数派のチェコ人やスロヴァキア人の追放、絶滅をも辞さないことが明らかになりました。」¹⁴⁾

1941年11月2日、ナチ党官房長ボルマンはヒトラー・ユージェント指導者シーラッハに宛てた手紙でこう書いている。

「総統が強調されているように、貴殿のウィーンでの職務は新たな住宅地区の創造ではなく、現状の整理にある。すなわち、差し当りは親衛隊指導者ヒムラーと連絡をとり、速やかに全てのユダヤ人を追放することである。そして引き続きチェコ人やその他の異民族を追放することである。」¹⁵⁾

こうしたナチスの方針に従い、半年後にチェコ民族グループ協議会（少数派協議会）は秘密国家警察により禁止され、財産は没収された。秘密国家警察ウィーンの日報では「帝国内務相の指令によりウィーンに存在していた12のチェコ人のスポーツ・体操連盟は解体され、存続禁止となった。同時に将来の教育のために蓄えられていた連盟の財産は没収された」と記されている¹⁶⁾。

トゥルクザクたちオーストリアの抵抗運動グループはドイツの抵抗運動グループとではなく、チェコ人やスロヴァキア人のグループと共に行動した。グループの最初のビラは主として労働者への呼びかけだったが、ビラはトゥルクザクが婚約者シュテパニックのタイプライターを使って原稿を作成し、チェコ人の新聞社の印刷所で印刷された。後にビラはメンバーの所有する家庭菜園の中で謄写版で印刷された¹⁷⁾。

グループはビラ以外にも「チェーンレター」を作成して前線に赴いている兵士へ送り、脱走

14) Cordon, a.a.O., S.55.

15) Ebd., S.56.

16) Ebd.

17) Mayrhofer, a.a.O., S.149.

するよう訴えた。トゥルクザクはこの「チェーンレター」の活動をこう記している。

「私たちの知り合いの中に既に召集された兵士がいました。それは私たちが信頼していた人たちでした。彼らから私たちとは面識のない兵士たちの戦地での軍事郵便部隊番号を聞き出し、その住所に差出人なしのチェーンレターを送付しました。私たちは兵士に、その手紙をさらに信頼の置ける知人に送るように頼みました。手紙の内容は当然ながら共産主義のイデオロギーに基づいた、おおよそ以下のような内容でした。(兵士よ、同志に敵対する闘いにあなたを利用させてはならない、同志に向けて銃を撃ってはならない、武器を向けるのはプロレタリアートの抑圧者や搾取者に対してだ。帝国主義戦争を市民戦争に転じるのだ。)¹⁸⁾

トゥルクザクたちの呼びかけに何名の兵士たちが応じたのかは正確には分かっていない。また呼びかけに応じて軍を脱走した兵士たちは右翼や保守派からだけでなく、普通の国民からも差別される傾向にあり、彼らのごく少数しか自らを脱走兵として認めなかったという状況もある。総計では約 5 万人の脱走兵に死刑判決が求刑され、その内 2 万人が有罪判決を受け、1 万 5 千名が処刑されたとのことである¹⁹⁾。

戦争が進むにつれ、トゥルクザクたちのグループの行動は過激化し、1940 年の夏には 14 件もの放火を行なっている。

「私たちはロバウやシュヴェヒャートの軍の所有物だった干し草や穀物倉庫に放火しました。反ボルシェビキの展示会(仮面を取ったボルシェビキ)が行なわれていたウィーン北駅のホールでの襲撃は失敗しました。発火装置が発見されてしまったか、あるいは作動しなかったからでした。既に行なわれた仲間の逮捕への抗議として私たちはタンデル市場の蚤の市も夜間に放火しました。(。。。)しかし私たちは人の生命を危険にさらすことは決してしませんでした。」²⁰⁾

トゥルクザクたちのグループはこうした抵抗運動を密に行ないながら、普通の市民としての生活も続け、自分たちは安全だし、発見されることはないと思っていた。トゥルクザクはこの間にスラヴ文化研究所で通訳の試験に合格しており、農産物取引所の検閲係りを希望していた。検閲される人に事前に警告してやりたいと考えたからだった。トゥルクザクは採用され、またトゥルクザクの婚約者シュテパニクもポーランドの外国人労働者の手紙の検閲の仕事に就くことが出来た。

18) Cordon, a.a.O., S.59f.

19) Ebd., S.60.

20) Ebd., S.61.

「私たちは常に些細なことを見つけました。何も検閲していない、と言われなかったためにです。（。。。）しかし私の雇用は僅か3カ月しか続かず、解雇されてしまいました。（。。。）私の男友達もしばらくして解雇されました。私たちの解雇の理由は〈国家安全上の理由から〉となっていました。」²¹⁾

この解雇理由にトゥルクザクのグループはもっと注意を払い、抵抗運動活動をしばらく差し控えなければならなかったはずである。しかしグループは相変わらず安全だと信じていた。

IV トゥルクザクの逮捕とラーフェンスブリュック強制収容所への移送

秘密国家警察の報告ではトゥルクザクのグループによるウィーン地区での最後の放火は、1941年8月31日と翌9月1日の13件の藁の山と納屋への放火となっている。秘密国家警察は「オッシー」という偽名で一人のスパイをグループに潜らせることに成功し、グループの逮捕は時間の問題だった。トゥルクザクはそのスパイのことについて述べている。

「裏切り行為が常にありました。オーストリア共産党には常にナチのスパイが潜入していました。そうしたスパイの一人は自分のことを〈オッシー〉と呼んでいました。彼は私たちのグループやウィーンの他のグループを警察に密告しただけでなく、メーレンでも、スロヴァキアやユーゴスラヴィアでも密告していました。数多くの仲間が彼のために命を落としました。」²²⁾

9月5日、秘密国家警察はメンバーの二人を逮捕、拷問し、さらなるメンバーの名前を聞き出した。9月29日の月曜日にトゥルクザクが仕事から帰宅すると、二人の秘密国家警察が彼女を待ち受けていた。翌30日には婚約者のシュテパニクも逮捕された。

逮捕後、トゥルクザクはウィーン9区にあった警察署の独房に入れられ、尋問のため再三にわたってウィーン1区の秘密国家警察本部に連行された。

逮捕から1年後の1942年9月27日、トゥルクザクを含むチェコ人抵抗運動グループの13名の女性たちは、裁判にかけられることもなく、ラーフェンスブリュック強制収容所へ移送されることになった。こうしてトゥルクザクの2年半以上に亘る苦難が始まる。

「私たちは列車でリンツを経てプラハへ向いました。20名の女性たちの中で私たち13名がチェコ人でした。（。。。）抵抗運動で積極的だったのは、13名の中で私を含む3名だけでした。」²³⁾

21) Ebd., S.64.

22) Ebd., S.70.

23) Ebd., S.88.

出発から 5 日後の 10 月 2 日、トゥルクザクはラーフェンスブリュック強制収容所に到着した。奇しくもその日は彼女の 25 回目の誕生日だった。

ナチスは 1938 年から 1939 年にかけてベルリンの北、約 38 キロの地点に女性用のラーフェンスブリュック強制収容所を建設した。そして 1945 年 4 月末までのほぼ 6 年間に様々な国から約 13 万 2 千名の女性たちを送り込んできた。ナチスの世界観に反する人々を排除するためである。対象となったのは、ナチスとは政治的に異なった考えの人々、人種的に望ましくない人物、すなわちユダヤ人やロマ・シンティ、犯罪を犯した人々、「反社会的人物」、さらには望ましくない宗教の信者たち、とりわけ「エホバの証人」たちだった。トゥルクザクが到着した当時のラーフェンスブリュック強制収容所では囚人の 80% 以上にあたる約 2 万人が政治犯だったという²⁴⁾。

トゥルクザクは到着の際のショックをこう記している。

「この収容所への到着は私にとって非常なショックでした。私を襲ったのは最悪のものでした。それはそれまでの囚人生活の中で最も恐ろしいものでした。暗くて陰鬱なバラックの間の細い通路を女性たちが、それを履くと普通には歩けない木製の上履きを履き、足を引きずるようにして移動していました。単調なストライプの入った囚人服を着て、頭には頭巾を被っていました。髪の毛のない女性たちもいました。全員が痩せ衰え、身をかがめていました。(。。。) 不安の念が私を捕えました。」²⁵⁾

新たに到着した囚人たちは、ショッキングな受け入れの儀式で望みのない自分たちの将来を、自分たちの価値のなさ、生き残るチャンスの無さを思い知らされた。受け入れの儀式で個人の持ち物は全て没収され、髪に虱がないかどうか調べられ、いた場合には髪を切られて坊主頭にされた。さらに囚人たちからは名前が剥奪され、代わりに囚人番号が与えられた。トゥルクザクには囚人番号 14177 が与えられた。またその囚人番号は囚人たちのカテゴリーに応じて色の異なる三角形のワッペンに書かれ、囚人服に縫い付けられた。トゥルクザクたち政治犯には赤、犯罪者には緑、非社会的存在は黒、ユダヤ人には黄色のワッペンが与えられた²⁶⁾。

囚人たちが入れられた各ブロックには 270 ものベットがあり、各ブロックに時には 1600 名から 2000 名が押し込められていた。浴室・衛生施設は囚人の急激な増加に追い付かず、不十分だったため身体を洗う機会もなかった。食事も酷く、主食は皮のついたままの煮たカブ、時

24) Strebel, Bernhard: Die Lagergesellschaft. Aspekte der Häftlingshierarchie und Gruppenbildung in Ravensbrück. In: Füllberg-Stolberg/Jung/Riebe/Scheitenberger (Hrsg.): Frauen in Konzentrationslagern. Bergen-Belsen. Ravensbrück. Bremen Edition Temmen 1994, S.79.

25) Cordon, a.a.O., S.93.

26) Strebel, ebd.

にはジャガイモが付き、夕食には薄いスープが付いたが、パンが支給されることは殆どなかった。

トゥルクザクたちには毎日極めて過酷な労働が割り当てられた。道路の舗装、砂や石運び、更には危険な弾薬工場での労働などだった。しかししばらくしてトゥルクザクはオーストリアの政治犯囚人たちとの繋がりができ、特に有名な社会民主主義者のヨッホマンがブロック長をしていたブロックに入れる好運にありつき、「比較的恵まれた」仕事にも就くことも出来た。ヨッホマンはさらにトゥルクザクの仲間も同じブロックに入れるように手配してくれた。ヨッホマンは1940年から1943年にかけて政治犯収容のブロック1の最年長の重要な囚人幹部だった。そのため彼女は、新たに到着するオーストリアの政治犯の囚人たちを、自分のブロックに移すことが可能だったのである。ブロック1はラーフェンスブリュック強制収容所に公式の訪問がある場合にはモデルブロックとして公開されていた。そのため他のブロックよりも少なくとも1943年頃までは衛生状態も比較的良好な状況が続いていたのだった。

トゥルクザクはこうしてジーマンスの事務所での仕事に就くことになった。事務所での仕事は体力を消耗させる仕事でもなく、衛生状態も比較的恵まれていた。また上司が風を嫌ったので、時には風呂に入ることも許され、年に2回、新しい服も支給されたのだった。このジーマンスの事務所での仕事によりトゥルクザクは大きな生き残りのチャンスを得たのだった。

V ラーフェンスブリュック強制収容所での抵抗運動

強制収容所内での抵抗運動の目的は出来るだけ多くの囚人たちを親衛隊による殺害から守ることだった。個々の囚人による抵抗と、主として共産党員を中心として結成された組織による抵抗が行なわれた。トゥルクザクたちの共産党員を中心としたグループはすでに存在していた国籍別の組織から国籍を超えた国際的な組織に編成されていった。グループは親衛隊が自分たちの業務の軽減のために設けていた「囚人自己管理」の制度を利用し、絶滅収容所送りのリストを改ざんしたり、弱っている囚人を「軽作業」の班へ異動させたり、補給施設の管理の立場を利用し、親衛隊用の食料品や衣類を盗むなどして、死に脅かされていた多くの囚人たちを救済することが出来た²⁷⁾。

トゥルクザクたちが行なった抵抗運動のもう一つの大きな柱はサボタージュだった。囚人たちが動員されていたジーマンスの軍需工場では仕事の進行を遅らせたり、資材を故意に紛失したり、使用不能な欠陥製品を作る、というサボタージュ行為が行なわれた。トゥルクザクはそうしたサボタージュのことを報告している。

27) Heike/Strebel: Häftlingsselbstverwaltung und Funktionshäftlinge im Konzentrationslager Ravensbrück. In: Füllberg-Stolberg/Jung/Riebe/Scheitenberger (Hrsg.): Frauen in Konzentrationslagern. Bergen-Bersen. Ravensbrück. Bremen Edition Temmen 1994, S.90ff.

「ロシア人女性たちはサボタージュを見事に共同して行なったのでした。(。。。)彼女たちはニンニクを持ってきていました。それをどこから持ってきたのかは、私は知りません。彼女たちはそれを指に刷り込み、その後で機械の敏感な部分に触ったのでした。機械は動くのは動きましたが、使い物にはなりませんでした。」²⁸⁾

トゥルクザクは働いている囚人たちの成績曲線を誤魔化す、というサボタージュも行なっている。そうすることで意図的に作業工程を遅らせた囚人たちを護り、また肉体的に衰弱し、もはや要求された作業が困難な囚人たちの存在を隠したのである。また仕事の早い囚人たちの作った製品の幾つかを抜き取り、仕事の遅い囚人たちの元へ運んで行き、辻褄を合せるような工作も行なった²⁹⁾。

トゥルクザクは一方でそうした抵抗運動やサボタージュといった肉体的に消耗する活動を展開しながら、他方で精神的、文化的活動も行なおうと努めた。彼女たちは幾つかの小さなグループを組織し、オーストリア人の共産主義者エルンストの指導のもとで政治研修を行ない、グループを立ち上げ、文化的な活動も行なった。

「エルンストは収容所へやって来ると一彼女は収容所に入れられるまではオーストリア共産党の指導部の一員でした—グループを立ち上げようと提唱しました。私はその後3名のウィーンのチェコ人と一緒にグループを作りました。(。。。)

私が室長だったジューメンスのバラックでは文化的な催しを開催することができました。私たちは自分たちの気持ちや心、知性のために何かをしたかったのでした。

チェコ人は大きなグループで、その中には芸術家、役者、ダンサーなどがいました。彼らは詩や歌や芝居の一部を暗記していました。バラックでは時折ちょっとした芝居を上演しました。チェコ人に所属していることが大いに私の役に立ちました。密かに私たちはスメタナやドヴォルザークの歌、あるいは民謡をうたいました(。。。)。

ある日のこと、一人の囚人が、私たちがジューメンスのバラックで行なっていることを全て密告したのです。(。。。)私は罰として絶滅収容所ウッカーマルクトへ移送されました。」³⁰⁾

トゥルクザクが絶滅収容所ウッカーマルクトへ移送されたのは、1945年1月末のことだった。この絶滅収容所には1945年1月から4月までの短期間に約6千名の女性囚人が送りこまれ、その内の5千名が殺害されたという、まさに恐怖の絶滅収容所だった。

28) Mayrhofer., a.a.O., S.168.

29) Ebd.

30) Cordon, a.a.O., S.103f.

「多くの国が占領され、そこで抵抗運動が生まれると、それだけ一層多くの女性たちが強制収容所へ送られてきました。ラーフェンスブリュックも完全に満杯になりました。その後、病人や手のかかる囚人はウッカーマルクへ送ることが決定されました。公式には休養のため、ということでした。パニックが生じないように、そう言ったのです。(。。。) 私たちが到着すると、そこにはバラックが5棟立っていました。(。。。)。冬の最中に囚人たちから靴下と上着が取り上げられました。彼女たちは凍え死ぬ運命でした。

囚人たちが到着したその夜の内に死んでしまう、という事態も生じました。彼女たちは非常に衰弱していて、辛勞に耐えられなかったのです。(。。。) 一人の女性が病棟バラックで看護婦を装い、囚人女性たちに白い粉を投与していました。それは毒薬でした。また彼女は注射器を使って囚人たちを死亡させました(。。。)

女性たちはその後焼却されました。焼却炉からは昼も夜も煙が立ち上っていました。焼却炉は今でもまだ残っています。」³¹⁾

トゥルクザクはそうしたウッカーマルク絶滅収容所で「不安の念」に苛まれながら生活を送っていた。しかしある日、彼女は看守と一緒に用務のためラーフェンスブリュックへ赴くことになった。トゥルクザクはその折にかつての仲間に、ウッカーマルクの恐ろしい体験を語り、もはや耐え難いと嘆いた。それを聞いた仲間は、オーストリア人の囚人で、1943年からは収容所警察官のトップを務めていた女性の元へ行き、トゥルクザクの話を話したところ、彼女はトゥルクザクをラーフェンスブリュックへ呼び戻すよう、収容所長に掛け合い、実際に呼び戻すことが出来たのだった。この収容所警察官の囚人は共産主義者で、「ウィーン労働者新聞」の編集員として働いていたという³²⁾。しかしながら彼女の評価は分かれており、トゥルクザク自身も「彼女がもしかすると私の命を救ってくれたのかもしれませんが。でも彼女は理想的な囚人ではありませんでした」と、記している³³⁾。

1945年早春、ロシア軍が近づいてくると、ナチスはウッカーマルク絶滅収容所を閉鎖し、病人や老人をラーフェンスブリュックへ送り返した。そしてラーフェンスブリュックで死の選別が行なわれたのだった。そうした選別から仲間を救うことに成功した事例をトゥルクザクは語っている。

「私が短期間ブロック3の室長だった時、私たちは病人や年取った仲間の髪の毛に靴墨を塗り、点呼の際には直立不動で立っているように、と説得しました。彼女たちが元気であるかのよう

31) Ebd., S.111ff.

32) Heike/Strebel, a.a.O., S.94.

33) Ebd., S.95.

に見せるためにです。」³⁴⁾

秘密国家警察の拷問で身体が麻痺していた一人のオーストリア人の女性がいた。トゥルクザクたちは何とか彼女を死の選別から救いたいと考え、既に亡くなっていたフランス人の囚人の名前と囚人番号を彼女に与えたのだった。既にこの時期にはスウェーデンの赤十字がフランス人の囚人たちを収容所から連れ出すことが許されていたからである。フランス語の出来たトゥルクザクは赤十字の職員の質問に本人の代わりに答えてやるなどして、無事に彼女をスウェーデンへ脱出させることが出来た。

ユダヤ人囚人たちの中にも他の囚人になり済まして、助かった者たちもいた。

「1945年4月末の時点で、収容所は既にカオス状態でした。(。。) そのお陰で後にアウシュヴィッツからラーフェンスブリュックへ移送されたユダヤ人たちの中にも毒ガスを免れた人たちがいました。彼女たちは瀕死の囚人たちの名前や囚人番号をもらったのです。瀕死の囚人にはもはや助かる見込みはなかったからでした。ユダヤ人女性たちは囚人仲間の医師から肌彫られた囚人番号を消してもらいました。囚人番号で自分たちの正体がばれないようにです。」³⁵⁾

1945年4月末の時点で、ラーフェンスブリュック強制収容所にはまだ約18,000名の囚人がいた。ロシア軍がいよいよ近づいたとき、収容所司令官は収容所の閉鎖を命じ、自力で歩ける囚人だけを一緒に連行することにした。病人及び衰弱した囚人は囚人医師と共に収容所に置き去りにされた。

1945年4月30日、ロシア軍はラーフェンスブリュック強制収容所を解放し、ほぼ3千名の囚人および囚人医師や囚人職員を解放した。

VI ウィーンへの帰還

トゥルクザクたちは親衛隊と共に西に向かって進んでいった。しかし機会があればいつでも逃亡するつもりだった。というのも、西に向かっての行軍は死の行軍となることが明白だったからである。そして実際にトゥルクザクたちは行軍の隙をついて逃亡することに成功した。

逃亡したトゥルクザクたちは西ではまだ戦闘が行なわれているため、逆に東へと進んで行った。何度か危ない目に遭ったトゥルクザクたちは、途中で出会ったスロヴァキア人の戦争捕虜たちと一緒に帰郷することにした。トゥルクザクたちは戦後で混乱している地域を苦労しながらウィーンに向けて進んで行った。途中で親切なロシア兵に出会って食料品や衣服を分けても

34) Cordon, a.a.O., 117.

35) Ebd., S.117f.

らったりしたこともあった。

1945年5月末、トゥルクザクは遂にウィーンへ戻ってくることができた。

「とうとうウィーン20区に辿り着きました。私は疲れ果て、気分が滅入っていました。氷工場の敷地内にある両親の家へやってくると、我が家はもはやなく、あったのは瓦礫と灰だけでした。(。。。)両親はあるエンジニア所有の別の住まいに引っ越していたのです。そこに両親は1部屋をもらっていました。それが私が今でも住んでいる共同住宅なのです。両親は後に集合住宅内に自分たちの住居を得ました。それは逃亡したナチスの住まいでした。」³⁶⁾

トゥルクザクは再会した両親から兄シュテファンと婚約者シュテパニックがもはや生きてはいないことを聞かされた。トゥルクザクの弟ヤンも亡くなっていたが、それはトゥルクザクがまだ収容所にいる時に知らされていた。トゥルクザクは婚約者シュテパニックからの最後の手紙を1944年3月に受け取ったが、それ以降は彼の消息は全くなかった。シュテパニックは親衛隊に逮捕され、厳しい尋問に耐えられず、1944年6月21日、自殺を遂げていた。もしかするとトゥルクザクがシュテパニックや兄シュテファンの死を耳にしなかったことは、幸いだったのかもしれない。もし耳にしていれば生き延びようという気力も意欲も失い、他の多くの囚人たち同様に収容所で命を落としていたかも知れないからである。この二人を失った悲しみに関してトゥルクザクはコルドンのインタビューでも決して語ることはなかったという³⁷⁾。

一方、トゥルクザクの妹アンナはチェコ人の夫と共にイギリスから戻り、チェコスロヴァキアに住んでいた。彼らは両親に自分たちの元へ来るようにと説得し、両親はしばらくしてアンナの元へ引っ越しに行った。

ウィーンに一人残ったトゥルクザクは人道的な組織「チェコ人の心」の代表を務める人物の推薦でチェコスロヴァキア公使館に秘書として働くことになった。それはトゥルクザクが再三強調しているようにつかの間の幸せな時代だった。

「1946年に私はチェコスロヴァキア公使館で雇用契約を得ました。(。。。)1951年以降はチェコスロヴァキアが自国人をすでに研修させていて、チェコスロヴァキア国籍の人間を採用する予定でした。この時点まで4名のウィーン在住のチェコ人が公使館に採用されていました。最初私は文化担当部局で、その後は管理部で働きました。公使館でのこの時期は素晴らしい時代でした。」³⁸⁾

36) Ebd., S.133.

37) Ebd., S.134.

38) Ebd., S.137.

こうしてトゥルクザクはしばらく落ち着いた生活を送ることになる。そんな折、彼女は一人のユダヤ系の男性と知り合い、恋に落ちる。トゥルクザクはしばらくして妊娠していることに気付いたが、ベルギー在住のポーランド女性との間に既に子供が一人いた彼は、トゥルクザクとの子供を望まなかった。結局、トゥルクザクは彼と別れ、シングルマザーとして生きていく決意を固めた。

1950年にチェコスロヴァキア公使館での雇用契約が切れたトゥルクザクは、親しかったオーストリア共産党ウィーン支部議長の妻の斡旋で、前年から彼女も加盟していた「チェコ少数派連盟」の機関紙の編集員に採用された。トゥルクザクは編集員として働く自信はなかったが、彼女が1945年から入党していたオーストリア共産党の仲間たちから「共産主義者にとって不可能なことは何一つない」と励まされ、編集員として働くことになった。1951年には息子も生まれ、トゥルクザクは子育てもこなしながら機関紙の編集に携わった。

そんな折、トゥルクザクはふとしたことからオーストリア共産党チェコ人支部の金銭的不正を発見した。正義感の強いトゥルクザクは数名の同志とそれを告発しようとしたが、逆に党によって「裏切り者」と批判され、「チェコ少数派連盟」の編集員を解雇され、連盟からも除名されてしまった。幼い子供を抱えたトゥルクザクは精神的、経済的にも追い詰められ、苦境に陥った。

こうした状況の中でトゥルクザクは共産党との決別を考え始める。

「収容所時代のことを思い出すと、勇気と希望を与えてくれた共産主義者の女性たちが真っ先に浮かんできます。私は彼女ら共産主義者たちを極めてノーブルな人たちだと思っていました。しかしその後、次々と幻滅することになりました。そして最後に私は徹底的にやられてしまったのです。私はこう誓いました。もう二度と党のメンバーにはならないと。」³⁹⁾

しかしながらトゥルクザクが実際に離党したのは、十数年後の1968年のことである。自分が離党することで、チェコで暮らしている両親や妹たちが厄介な目に遭うのではないかと懸念したためである。

トゥルクザクは生活費を得るために、それまで申請していなかった第二次大戦の犠牲者に支払われていた「犠牲者年金」を申請する。そうして少ない額ではあったが年金を得ることが出来た。彼女は息子が4歳になるまで、それまでの蓄えと年金で何とか生活していたが、以前に「チェコ少数派連盟」の機関紙の編集員に斡旋してくれた親友が、再度小さな工場の賃金計算係りの職を世話してくれた。その後、幾つかの職場を転々としながら、最後はジーメンスの

39) Ebd., S.143f.

輸入担当として働き、そこで定年を迎えている。

VII「ラーフェンスブリュック強制収容所共同体」の設立

トゥルクザクは「ラーフェンスブリュック強制収容所共同体」設立に至った過程について述べている。

「私たちの誰もが自分の記憶を自分一人で抱え込んでいました。長い間、私たちは監獄や強制収容所での体験を誰にも話すことはできませんでした。私は両親にも、後に生まれた息子にも強制収容所の体験に関しては決して口にしませんでした。私は自分が経験した恐ろしい出来事で誰も苦しめたくはないと思ったからでした。しかしながらしばしば暴力や死、非人間性の光景が私を襲い、夢の中で私を追いかけ、死の不安が私の心の中深く広がっていきました。多くの人にとってもそうでした。それである日、私たちは共同体を設立することを決心したのでした。私たちと残された家族に仲間自身から支援ができるようにするためにです。自分たちの権利と政治的利益を既存の法律の枠内で代表することが、私たちの目的でした。私たちはファシズム、ナチズム、ネオナチズムに対して、さらに人間と民主主義の抑圧に対しても闘おうと思いました。私たちは自律、自由、民主主義そして中立のために闘うつもりでした。こうしてラーフェンスブリュック収容所共同体が設立されたのです。」⁴⁰⁾

この共同体のホームページには共同体の歴史に関してこう記されている。

「オーストリア・ラーフェンスブリュック強制収容所共同体の設立は2つの年月日と結びついている。1947年5月24日にウィーンの旧市庁舎の祝祭ホールで公的な設立式典が執り行なわれ、ラーフェンスブリュックのオーストリアの生存者たち、外国からの代表団、および政界からの代表者が参列した。社団登記簿への登録はしかしながら1958年になってからだった。」⁴¹⁾

この共同体はファシズム、ナチズム、反ユダヤ主義、人種主義に反対し、民主的な社会システムの構築を目指すものだった。そのためにオーストリア国民、とりわけ若者たちにナチスの残虐性、暴力性を訴え、さらに自由なオーストリア建設のためには女性たちの役割が大であることを訴えた。またかつての抵抗運動闘士たちの業績を公式に認め、そうした女性たちに相応しい様々なポストを与えるよう呼びかけていくことだった。

そして実際に政治的に活躍した元囚人の代表が、トゥルクザクも強制収容所で世話になっ

40) Ebd.,S.150.

41) <http://www.ravensbrueck.at>. 参照。

たヨッホマンである。彼女は 1959 年から 1967 年までオーストリア社会党の看板党員として、女性党員のトップとして活躍した。さらに 1994 年 1 月 28 日に亡くなるまで、彼女はオーストリア・ラーフェンスブリュック収容所共同体の代表を務めている。

トゥルクザクはジーマスを定年退職した 1970 年代末に収容所共同体で働くことになった。彼女はそれまではラーフェンスブリュック強制収容所関係の幾つかの団体の秘書や事務局長を務めていた。95 歳の現在は全て引退しているが、90 歳まではインターナショナル・ラーフェンスブリュック委員会の副議長を務め、月曜から木曜まで事務所へ通ったという。

1995 年以降、収容所共同体は元囚人以外の若い人々をも組織に入れ、現在はそうした若い女性たちが議長を初め、様々な役職を引き受けている。ただこの共同体設立の二つの原則はしっかり守られている。その二つの原則とは以下の原則である。

- 1) ファシズムの最悪の形であるナチズムに対する私たちの闘いの記憶の維持
- 2) 民主主義の堅持、およびあらゆる形式の独裁、外国人排斥、人種主義および反ユダヤ主義に対する無条件の闘い⁴²⁾

トゥルクザクたちの活動は 1978 年によくオーストリア政府から認めてもらうこととなった。すなわちトゥルクザクたち、かつての抵抗運動の闘士たちは大統領から「ナチスの暴力支配からのオーストリア共和国解放へ寄与したことに対する荣誉賞」を受け取ったのだった。さらに 2001 年 3 月 8 日、この日は「女性の日」に制定されているが、トゥルクザクも含めた 15 名がウィーン州のゴールド功労賞を受賞し、トゥルクザクはお礼の演説を行なっている。また 2004 年の 3 月 8 日にはオーストリアの緑の党がトゥルクザクを「今年の女性」に選んでいる。

戦後 60 年たった 2005 年、ベルヴェデーレ宮殿で政府による記念のセレモニーが執り行なわれ、トゥルクザクを含めた 10 名のかつての抵抗運動の闘士が招待された。しかしトゥルクザク自身は、それは単なる「アリバイ工作」であり、「実に不愉快だった」と述べている⁴³⁾。

おわりに

冒頭に書いたようトゥルクザクは 2012 年の今年、95 歳の誕生日を迎えている。その生命力にはただただ頭が下がる思いである。彼女をそこまで生かしているものは、戦後 60 数年たった今でも衰えることのない「決して忘れないこと！」という彼女の想いである。

42) Ebd.

43) Cordon, a.a.O., S.154.

「私たちの足は非人間的な苦悩を受け入れた大地の上に立っています。私の前には焼却炉、はるか向こうには収容所の壁の一部が、私の左手には囚人房、私の後ろには射殺場への通路があります。それらは恩寵のない時代の最後の無言の証人なのです。ナチスのシステムによる限らない苦しみ、残虐さ、人間の根絶の時代の証人なのです。

私たちは解放された日を喜びで祝うべきでしょうが、私たちの心や想いは苦しみや悲しみ、恐ろしい記憶に包まれています。年月はその犠牲を求めるものですから、私たち生存者たちは、もうそう多くはいません。でも可能な限り、あの時代の記憶を保持し、忘却や記憶からの排除と闘い、理解できないことを否定したり、想像できないことを否定することと闘っていきます。この地上で人間が同じような体験を二度とすることがないようにです。」⁴⁴⁾

44) Ebd., S.155.

